

浄土

二月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別扱承認第352号)
昭和四十四年一月二十五日 印刷 昭和四十四年二月一日 発行

第三十五卷

第二号



目 次

表紙「みのぼっち」松濤達文画

ねはん会に寄せて 安らかな静かな最後	神 林 一 彦 (2)
ねはん会に因んで	(5)
ハワイの浄土宗	井 川 定 慶 (6)
座談会 現代人の信仰②	(9)
十二因縁② 念仏の信否	渋谷 賢 応 (14)
ハガキでひとこと② 寒さと私の健康法	(17)
現代生活と宗教⑤	松 川 文 豪 (18)
阿弥陀仏の御性質	岡 本 薫 (20)
教育と宗教②	形 部 英 一 (22)
ご法語をいただく	(25)
ののさま	有 賀 伸 興 (27)
ある微笑み	松 田 竹 治 (28)
ひとくち伝記② 少年会が本堂を建てた	高 橋 良 和 (30)

今月のことば



霜柱が立っている黒々とした土の間には、小さな新芽がみとられるこの頃です。北国では、今年は例年にならない豪雪に見舞われ難儀をしておられるようであり、暦の上では立春とはいえ、まだまだ寒波のおとずれがあることと思います。

今月は、おねはん（涅槃）月ともいわれます。お釈迦さまがお亡くなりになられた月だからです。

ねがわくは花の下にて我しなん

そのきさらぎの望月のころ

これは西行法師の歌であります。自分も死ぬときには、お釈迦さまと同じように、二月十五日ごろの、美しく咲ききそう桜の花のもとで、死にたい、という意味であります。その頃は旧暦でしたから、涅槃月にも桜が咲いたことでありましょう。

このように、美しく安らかに死をおもう心のゆとりを、現代の人びとはもちにくいようであります。死を考えるとすることは、人生に敗北し、絶望を感じ、厭世的なことのようにおもっている人びとが多いようです。

しかし、生と死は別々のものではなく、背中合せのようなもので、死を考えるとということとは、生を熟慮するにほかならないのです。一度は死ぬわが身であってみれば、生きていくことの尊さ、大切さをしっかりと味って、今日一日たりともうとんずることなく、精一杯生きることを実感することになるのであります。

死がほんとうにわかるとき、人の悲しみの心が自分の悲しみとしてうけとめることができるのではないのでしょうか。自分だけが生きていとおもい、死んだときはそのときという刹那的なうけとり方しかできない現代人は、まことに不幸なことであります。お釈迦さまのお涅槃のこころをかみしめ味いたいものです。

ねはん会に寄せて

安らかな静かな最後

一

仏陀の晩年は、かならずしも静かなものではありませんでした。身边には、悲しい事件が起っております。それは、従弟であり、有力な弟子の一人であった提婆の反逆があり、仏陀の心を悩ますものでありました。もう一つは、仏陀の故国、釈迦族の国の滅亡ということでありました。釈迦族の国は、隣国のコーサラ国王のために、無惨にも滅ぼされたのですが、そのとき、仏陀の示された態度は、きわめて印象的であり、心にしみじみと打つものがあり、忘れることのできないものでありました。

それは、つぎのような、出来事であります。

仏陀は、コーサラ国王が通るとおもわれる道を、さきまわ



神林一彦

りして国王の軍勢がやってくるのを待っておりませんでした。その待っておりた道のかたわらに、繁った大木があるにもかかわらず、わざわざその隣りの枯木の下で涼んでおられました。コーサラ国王は、その様子をみて、いぶかしくおもい仏陀にそのわけを尋ねるのでした。

すると仏陀は、ただ一言、「親族の蔭は涼しい」といわれたのです。その言葉を聞いた国王は軍勢を進めることができずに、やむなくひきかえすのでした。

しかし、仏陀自身もさえぎることの不可能なことをさとられて、枯木の下に涼むことをやめられた。ひとたびは引きさがったコーサラ国王でしたが、やがてその軍勢によって、釈迦族は滅ぼされるのでした。

このなかで、「枯木」というのは、いうまでもなく釈迦族の国のことであり、「繁った大木」は、隣国コーサラのこと

を譬えているのであります。釈迦族の国の運命は、隣国コーサラの圧迫によって、いまや風前のともしびのごとくでありました。

しかしながら、仏陀の心は、この倒れかかった枯木のような釈迦族の国へ、かぎりない愛情をそそいでおられたのであります。それは、愛執にも等しいつよいものであったようにおもわれます。自らの生まれた故郷に対して、それほどまでにふかい愛著を示された、仏陀を偲ぶとき、人間としての仏陀のあたたかいぬくるみを感じるおもいがいたします。

人の世の、悩みも苦しみも克服して、つよく雄々しく人生を生きぬかれ、すべての生きとし生けるものに平等の憐愍を垂れたもう仏陀に、このような人間味のある一面のあることを確認するとき、仏陀とわたしたちのきずなが、あたたかいのちによってつながれているような気が、一層つよくいたします。

二

仏陀は、八十才のお年でお亡くなりになっておられます。それは、鍛冶屋の息子のチュンダのささげた食事をうけられたのですが、その食物の中毒にかかられたのが原因とされています。仏陀の死をまねいたのが、チュンダのささげた食物

によってであることをしったとき、かれは身を打ちふるわせて悲しみました。

そのとき仏陀は、チュンダをやさしく慰められながら、つぎのように申されています。

「かつて少女より牛乳のほどこしをうけて、さとりを得たときと、いまチュンダより食事のほどこしをうけて死をむかえたときと、その果報には差別はない。なぜならば、仏の身は永遠であって、いわゆる生まれ、食し、死するものではないからである。」

人びとをして、この世に対して執着をはなれしめ、生死のながれをこえしめんがために、仏陀は死を示されたのであるというのであります。

「仏のひさしく世に住せんことをねがってはならない。まさに世界をみよ。ことごとくみな無常である。生ずるものはみな死に帰する。わたしは、この世の彼岸にわたり、一切の苦をいで、ただ無上の樂をうけるものである。」

仏陀は、みなのがいをおさえて、このようにも説かれているのであります。

仏陀の入滅の模様については、大般涅槃經に、くわしく述べられてありますが、その入滅は、いかにも安らかな、おだやかな、そして、しずかなものであって、そのときの光景が

ありありと眼前にうかんでくるような気がいたします。

信頼された多くの弟子たちにとりかこまれて、沙羅双樹のもとに、静かに横たえられた御体には、なんらの苦しみもなく、八十年の生涯の幕を閉じられた仏陀の入滅は、まことに平和そのものであり、美しささえ感じられるものでありました。

これは、十字架の上で非業な死をとげたキリストや、自ら毒杯をあおいで死んでいったソクラテスとくらべてみますと、その死は、まったく安らかな、静かな最後でありました。

そこには、仏陀のあたたかい円満な性格があらわされているようにおもわれてなりません。仏教のもつ温和と寛容の性格は、仏陀の性格そのものによって、かたちづくられたものでありましよう。

三

涅槃（ニルバーナ）とは、もえさかる煩惱の火が消滅した状態を味します。それは、静寂なさとりの境地をさしたものであります。

まよいどは、人生の現実のすがたが異常であり、相対的な

ものであることを知らずに、それに固執するところからおこるものであります。

さとりとは、現実のすがたを遠観して、それをこえたところから永遠であり、絶対の世界があり、心の真のよりどころがある事を体得することといえましよう。

永遠であり、絶対の世界は、さとした人、すなわち仏陀の涅槃の世界であります。

しかし、それは、現実世界とは、はるかにかけはなれて存在する、というものでありません。もしそうだとすると、永遠の絶対の世界は、現実の世界と相対し、対立するものとして、絶対的なものではなくってしまい、真の永遠とはいふことができなくなります。

それは、対立とか限定をこえた世界であります。わたしたちの生活する現実の世界は、差別があり、相対立する有限の世界であります。仏陀の涅槃の世界は平等にして平和にみちみちた無限の世界であります。生死のくさりから解放され、真実安楽の世界であり、あらそいのない平和な世界であります。

すべての苦しみ悩みから解脱した涅槃の世界をわたしたちは、浄土といえます。仏陀の涅槃の世界は、浄土のおしえに導かれてこそ開かれてくるのであります。

ねはん会に因んで



涅槃図の懸りて暗き伽藍かな

大和人めんおく顔の寝釈迦かな

涅槃像懸けて涅槃を説き給う

おん胸の辺のあらはなる寝釈迦かな

箔はげしおん涅槃図に燭ゆらぐ

(以上作者名失念)

おん妻れなく瞑じ給う涅槃図絵

猫好きで猫のいる涅槃図絵を見に

(以上福田耕人作)

上記の俳句はいずれも昨年末、東京家庭裁判所において催された俳句会の際の作品の一部です。兼題として涅槃があげられ、富安風生先生の撰で披露されました。これらの句は埼玉県大宮市盆栽町在住の福田耕太郎氏より寄せられたものですが、会での感想を、多くはどうしても空想の句が多くなったようで、写実的なものが少なく残念でした、と申されておりましたが、読者の皆様の批評はいかがでしょうか。

「涅槃」とは本来は知恵が完成するさとの境地を指しておりますが、この意をくんで釈尊の入滅をも指し、涅槃図をかかげ釈尊の死を偲ぶ涅槃会を二月十五日に修すのであります。

福田氏の句に猫が読れているのは目黒祐天寺蔵の猫のいる涅槃図を見ての作ですが、わが国では高野山蔵が最古で最大の傑作でしょう。その他新薬師寺・石山寺・東福寺蔵が有名です。



井川定慶

(仏教大学教授・文博)

ハワイの浄土宗



一、明治元年もの

昨年九月十三日に浄土門主親下の命を拝して、ハワイ移民百年記念慰問巡教の旅に羽田空港から飛び発ち十月一日帰朝したのであるが、ハワイの浄土院では皆それぞれ工夫して教線をはっていられた。

さて話しは廻るが明治元年(一八六八)にハワイでは砂糖キビ・パイナップルの栽培に必要とする人夫を日本に求めて来たのに応じて渡布したのが所謂「元年もの」である。労働条件も悪く、男ばかりが小屋に住むという

から、暇さえあれば酒と博奕とに打ち込む、極めて殺風景な生活の連続であった。

そして死者が出ると周囲のものがよってたかって穴を掘り埋葬する。誰かが掌を合せて念仏でもすればそれがせめてもの供養という有様である。それらの墓はお弔いを続けられない「無縁仏」が多かった。

そこで昨午が明治百年相当というので仏教各宗団が発起して「これら『明治元年もの』こそが今日のハワイ開拓の功労者である。如何にして慰霊しようか」と協議した結果、オアフ島のホノルルにある「モイリリ墓地」へ、マウイ・カワイ・ハワイ等の他の島々から無縁仏の墓地の土を一握りずつ集めて来て、そ

の上に「同胞先亡慰霊塔」(佐藤栄作総理大臣揮毫)の石碑を建て、六月一日に各宗僧侶が集まって盛大に供養法要を行なうことにしたのである。恰かも常陸宮並同妃両殿下が来布中であつたから御臨席を願ひ、お花を捧げて頂いたという。ところでその石材は岐阜県関ヶ原からとりよせ、石碑の型デザインは浄土宗開教師河合了勝君が担当したのである。河合君は米本土の大学で美術意匠を専攻している適材である。

「明治元年」者と呼ばれる最初の日本人移住の総代牧野富三郎に与えられた岩倉具視の名による旅券には「決して他宗門に入るべからず」と記されていたという。徳川幕府以来

のヤソ禁教の風習が残されていたわけだが、渡ってみて仏教僧侶がいなかったのである。

僧侶による仏教の布教は明治二十二年（一八八九）真宗の僧侶によって始められ、浄土宗が正式にハワイを開教区と定めて岡部学応師を派遣したのは、明治二十七年（一八九四）である。

二、浄土宗の開教本部

岡部師はまずマウイ島における同胞を対象として第一声をあげ、次いでハワイ島に渡りヒロ・ハカラウ地方に布教、更にハマクワ地方一郡に教線を伸ばした時は、在日同胞が大々的な歓迎ぶりて旱天に慈雨を得たような悦びようで、自発的に浄財を拠出し本格的な仏教会堂を建立し、明治二十九年（一八九六）一月に入仏慶讃大法要を挙行するまでに至り、『ハマクワ仏教会堂』と命名されたのである。これが日本仏教各宗の中で正式布教の出来る仏教寺院として最初であったことを銘

記しておきたい。

爾来浄土宗では日本から開教師を盛んに派遣し、教線も次第に拡張したことから、これを統率する開教使長の必要を感じ、明治三十六年（一九〇三）三月に清水信順師が任ぜられた。これが浄土宗ハワイ開教総長の第一代ということになる。清水師はハワイ島ラウパホエホエの教会を本部としたが、そこは不便なところであつた。清水師より三年早く赴任していた伊藤円定師がホノルルにあって伝道を始め、サウス街に布教所を建てていた。伊藤師はそこへ清水師を迎え、開教本部を移させたのは一九〇五年のことである。そして一九〇九年三月清水師が辞任したあと、伊藤円定師は第二代総長に任ぜられ、師は、積極的活動を続けたが、これが今日の浄土教団の基礎を固めたものと見られている。第三代久家慈光、第四代立川真教、第五代井上照真の各師が尽力され、第六代福田闡正師の時に現在の地、マキキ街に三エーカー敷地を購入し殿堂を新築したのが現在の浄土宗別院なのである。その後、窪川旭丈、名護忍亮、宮本文

哲、中島真孝、稲垣真我を経て、現総長藤花教道師が第十二代目ということになる。

別院を本部とするハワイ浄土宗教団は、オアフ・カワイ・マウイ・ハワイの各地に十五の支部（浄土院）を持ち、二十二名の開教使がそれぞれ活動しているが、その何れにも婦人会、青年会、日曜学校をもち、日本語学校を経営して教学二途に貢献しているわけである。就中ホノルルの別院では十二万ドルを投じて学生寮を新築し、各島よりの信者の子女を安心してホノルルの大学に通学せしめ、兼ねて宗教教育をうけられる恩沢に恵まれている。

三、ハワイの葬式

ハワイでも死者が出来ると、早速所縁の寺へ枕経を頼みに来る。出かけると遺骸は葬儀所（株式会社）に移され、其処の「お通夜部屋」に安置される。ホノルルに此の種、葬儀所が十数軒あるが、最も代表的な細井葬儀所

を藤花総長の案内で尋ねてみた。通夜部屋と
いうのは幾つか地下にあつて、一部屋は約十

帖位、立派な仏壇がある。本尊は阿弥陀立像
である。ハワイでは浄土・真宗は勿論、日蓮・
禪宗でも阿弥陀本尊で差支えないらしい。部
屋には椅子、ソファが備付され一程の御回顧
のあと、そこで休息したり宿泊も出来るわ
けである。何分にも常夏のハワイのこと、暑
いから遺骸は冷凍室へ移されることになつて
いる。そして翌日一階の大広間告別式場正面
に安置される。式場には二千の椅子が設備さ
れている。補助椅子を両脇に出せば二千五百
人も収容出来るという大規模なものである。
然し小人数の場合は区切りを中に挟みその大
広間を二つに仕切り二、三百人、五、六百人
用に縮めることもできる。

導師は所属のお寺の主任であること勿論だ
が、役僧は付くし、交際している他宗の僧侶
が誦経僧として参列することも内地と同様で
ある。その服装であるが、日本内地のように
白衣の上に法衣をつけず、大抵は洋服の上へ

法衣・袈裟をつけるというのがちと変つてい
る。

葬式は先ず司会者の挨拶に始まり、故人に
一分間会葬者が黙禱を捧げる。それから棺の
蓋をあけて導師の引導下炬があり、阿弥陀経
の読経と念仏とがつづく間に遺族代表、一般
の焼香が行なわれる。よき頃あいを見計らつ
て導師の法話が十―十五分間、それは日本語
と英語の両様で行なわれるが、その内容は故
人の遺徳をたたえつつ、仏教、浄土宗の説話
がもりこまれている。次いで、「み仏に抱か
れつつ」の讃仏歌の斉唱があり、遺族代表の
謝辞、そして「念仏の讃歌」があつて棺の蓋
を閉じる。それから関係者と遺族、僧侶とは
式場外の廊下に並び記念写真を撮影して、一
般会葬者は散会し、あとは親族と導師とが棺
に附添つて火葬場へ行く。

火葬場では「一心頂礼」の舍利礼文を、遺
族は遺骸との最後の別れを惜しんで茶毘に付
すことも内地と殆んど同じである。

遺骨は翌日お寺へ持つて来て「骨上げ」の

法要を行なうが、そのあと、遺骨を寺（仏教
会堂）に安置して回向してもらうか、お墓に

埋めて墓石を構築するかである。ところが現
在ハワイでは寺以外に是れらの遺骨を永遠に
安置するための設備が次から次へ新構想の豪
華なものができている。即ち京都の金閣寺を
そっくり真似たもの、宇治平等院の鳳凰室、
或いは三重の仏塔というものが株式会社組織
で巨万の財をかけてつくられている。その代
りそこへ納骨するのに千八百ドル（六十四万
八千円）が要るらしい。

なお前記の葬儀会社で葬式をしてもらうた
めにはまず棺を注文するが、棺は実に立派な
装飾を施されているが、その価格は五百ドル
千ドル三千ドルから五千ドルという。三千ド
ルが普通いえば邦価に換算すると百八万円で
ある。然し棺だけではないので、遺骸の消
毒・通夜・告別式・お茶の接待・供花・写真
・火葬・送迎自動車・人夫賃も含めてである
と聞かされると成程そうかと思うであろう。
そして僧侶へのお布施は別になっている。

——出席者——

伊 東 芳 瑞

(竜泉寺住職)

寺 内 大 吉

(作 家)

中 島 真 哉

(梅窓院副住職)

松 川 文 豪

(聖橋高校々長)

真 野 竜 海

(大正大学助教授)

松 達 達 文

(画 家)

安 居 香 山

(大正大学助教授)

谷 部 忠 翁

(大 泉 寺 住 職)



△ 生きることの喜び △

真野 私と同じような経験をしました。死に至る程の痛ではありませんが、永らく入院していたある知人より宗教的な話しをしたいから来てくれとたのまれました。その人は毎夜一人になると、心眼にアミダ様が見えなんと

いう話しを聞くと何か浄土が私達の身近にあるような気が益々いたします。

安居 そういう人が死に直面した時に出るこ
とばなり態度は非常にありがたいものでし
うね。私が小金井に住んでいた頃のこと
が、身体の一部に湿疹が出来、医者にいつ
ところ分らないから慶応病院の皮膚科へ行
きなさいというんです。もう癌だと思い込
んでいた私は行きかけの中央線の中で向
いに坐っている人々をつくづくながめ、も
うこれでこの世の見取めかと思った時、
念仏が自然と口に出、救われたいとい
う気持ちもあつたでしょうが、今申さね
ばだめなんだという気持ちになり、涙が
とめどもなく出た経験があります。幸い
普通のおできだったのですが、こういう
時、危機と念仏が表裏一体となつてい
ることに気づかれました。

もいえぬ光悦を味うのです。これを医者に話せば幻覚症状だというでしょうし、見舞の人に話せば夢というでしょうから、このことについてお聞きしたいというんです。私はこれは感應同交ということで、仏が衆生を思えば衆生が仏を思い、衆生が仏を思えば仏が衆生を思うということです、と話しましたがこう

寺内 水商売のある女性の話しですが、彼女が十七歳の時、死にたい衝動にかられ、ある夜頸動脈を切ったのですが、鮮血があたり一面ほとばしり、血の海ができ、いよいよ最後が来たと思つた時、血の臭をかいで一匹の蟻が近よつて来たというんです。その蟻を見た瞬間

何かいとおしくなり、自分の最愛の恋人のよう
に思え、どうしてよいかわからないままにそ
の蟻を食べてしまったというんです。その直
後彼女は氣を失なったが、幸い発見が早く助
ったというのですが、この話を聞いた時、
生命の神秘というか、すばらしい告白を聞い
たと思いましたね。

安居 その瞬間は生きている者がうらやまし
いという氣持になるでしょうね。前の話しの
くりかえしになりますが、中央線に乗ってい
る時に涙が出てきて仕方なかったですね。も
う私という肉体はこの世から無くなるのでは
ないか、真剣に自己というものを考えざるを
得ませんでしたね。

△ウソと欲△

松川 そういう時に根本の南無阿弥陀仏であ
ると思いますね。そういうものを自分が唱え
るべきなのか、唱えなければならぬのかと
いう考えが生じてくると思うのですが。

安居 だから次は死ぬかも知れないという、
一瞬々々死ぬ前の一秒であると考えながら生
きなければならぬ。そうすれば生きている

間に最高の仕事・楽しみをしなければという
意識にかられましたね。

伊東 私の経験では涙が出るうちは死なな
いと思ひました。過日胃の手術をした折、自分
なりの覚悟を決め遺書を作り残った家族のこ
とを考えたのですが、一週間程してある程度
回復したので、その遺書を出して見ると、自
分の欲望ばかりなのです。こういう考えのあ
るうちは死ぬことはないと思ひましたね。

寺内 そういうものですね。本当に死んで行
く時はそのようなものではないでしょう。突
然にふっと来るようなものでしょうから。

伊東 人は死ぬ時はウソはいわない。自分の
恥を全部さらけ出すといわれますが、私など
は欲望のかたまりのようでしたからそんな心
配は無用だったのです。

安居 それでは私の出した涙は慙愧の涙だっ
たということになりますかね。しかし浄土の
信仰というものは経験しなければ分らないと
いうようなことで若い人々は説得できないと
思いますから、ここが大きな課題としてあげ
られますね。

△念と戒△

真野 私は逆に掘りさげなければ分らないと
いういい方がありますが、誰でもが掘りさげ
なくとも分るように平凡にいつてはくれない
かという逆の見方を強調したいですね。

安居 しかし体験を通して理解させるのが
一番手取り早いと思いますね。

真野 ですからそうした体験を通してという
のなら良いのですが、それを掘りさげなけ
ればといわれてもこまる訳です。

中島 そうした点をうまく取り入れているの
が新興宗教でしょう。

安居 私はいつも創価学会を例に出しますが
学会では厳しい戒律を課しています。例えば
題目を唱えるということでも、唱える時間が
なければその分だけ早く起きて唱えろとして
いる。それは大変厳しい戒律と申せましょ
う。浄土の念仏は申せる時に申せという、僧
侶自身にも戒律がないのですから、ましてや
在家の人々にするようにいったところではじ
まりませんね。我々も念仏も一つの戒律であ
ると考え、それを実践するだけの信念を持た

なければいけないでしょうね。

真野 浄土宗の戒がそういうものであれば良いと思いますが、念戒一致といれている程念と戒は一致していないのではないのでしょうかね。

△共に親しむ念仏へ▽

谷部 今までいろいろお聞きしましたが、私はちよつと異なった考え方をしています。現在グループサウンドの流行で若人はそれにしびれておりますが、法然上人の時代の人々はその教えの念仏にしびれていたと思うのです。ところが現在は僧侶だけの念仏になって来ているのです。自分は大学で宗乗を学んできた、だから法然上人のいう念仏は絶対なものであると、押しつけても現代の人々はついてまいりません。相手をしびれさせるにはどうしたならばよいか、まずは自分自身の体験、これが一番だということ、それに念仏を申す前の段階があると思います。勝手ないい方ですが、法然上人の念仏は私の念仏ではないのです。阿弥陀仏にお救いいただくことは同じなのですが、その人、その人の唱える念仏は

その人のものでなければなりません。そのようにさせるには僧侶がいかに相手を念仏にしびれさせるかという際、ただ念仏を唱えなさいといつても無理でしょう。これは私事です。が自坊で詩吟の会をしておりますが、老若男女それは大変なものです。それは自分の身体を動して行なっているためです。これは一つの方法論かも知れませんが、念仏信者獲得に一役かっております。過日も施餓鬼の際、法然上人のお歌月かげのを和歌調の節にし、プリントしてみんなで歌ったのですが大変好評でした。また私の先代は布教師でしたのでいろいろ聞いておりましたが、生れることから死らぬことまで幅ひろく話しておりました。ですから説教の中で精子と卵子の話しまでし、その代表である私のこの生命をいかにするかという話しに結びつけるのですが、これは大変真摯なこととして理解しているようでした。やはり机上の念仏であってはならない、身体をはって行なうものでなければなりません。

安居 法要の際などにみんなに詩吟をやらせる訳ですか。

谷部 寺の行事法要の後先にやらせ、その中に教えなどを盛りこみやつております。相手をしびれさせるには僧侶を離れ一俗人の立場で共に考えるのでなければ救えないのではないかと考えます。

安居 キリスト教の讃美歌ではありませんがみんなと一緒に行なうということは大変重要なことでしょうね。それをどの程度理解してくれるかというの問題であります。

△実のある廻向・葬儀とは▽

寺内 現在仏教には十三宗五十何派あり、各々教義はありますが、実践行としては各本山を除き、所謂町寺では供養のすすめ、廻向のすすめなどだと思います。ですから仏教学者にこの供養ということを教義的に体系づけることが最も必要であり仲間を救うことになるということ強くいいたいですね。

伊東 最近葬式無用論などといわれておりますが、逆に念仏を唱えさせるのは葬式仏教しかないのです。例えば通夜の際など最後に宗派を問わず焼香にみえた人々と共に十念を唱えるのですが、こうした形の中にこそ念仏が

生かされるのだと考えても良いのではないでしようか。

寺内 私もこのように考えます。過日護国寺で真言宗の僧侶の集いの際話したのですが、葬式仏教ということにコンプレックスを感じてはいけない、これが一番大事なことであり、壇上で一言をはいている人々、その内容が現実にはなされていないことを考える時、なお更に自信を持つべきであると。

伊東 ところが私自身浄土宗の教えはこうであるという自信をもってはいえないものですから、実際にはそのようにしざるを得ないのです。**寺内** そうです。そのような線を出してもらいたいと第一線で戦っている僧侶は求めていると思います。この問題で悩んでいるのが現実なので、この点をはっきり打出す必要があるので。

伊東 過日朝日新聞の投書欄に葬式仏教賛成という意見を四つほど理由上げて、いかに勝れているか述べていた人がありましたが、私も全くすばらしい意見であると思いました。**松川** 問題は人間愛を縦と横の関係でみた際現代は縦の系列を無視し、横の系列だけを重

視する時代だと考えます。それに対して廻向が葬式仏教が縦の系列に対してどのような考えるのか、この点への認識理解が最もアピールできなければ、矢張り廻向・葬式仏教はすたれて行くような気がいたします。それはそうした愛をいかに大衆の中にアピールしていくか、この課題をまず僧侶は考えるべきだと思います。つまり人間愛の縦の系列の必要性を認識させることが必要があり、これがなされればおのずと廻向・葬式仏教の有用が理解されるのではないでしようか。

寺内 相関々係ということになりますね。

安居 松川さんのいう縦の系列というのは親や祖先への恩ということですか。

松川 そうです。それを自覚した際に、自分をいかに発奮させ、みがきあげていくかというところが一番重要だと思います。

△遠くて近い念仏へ▽

谷部 今はそのものズバリという時代ですから易者が流行しています。しかし、僧侶はそのものズバリをいえない立場にあります。ですからそのものズバリいえる状態の自信を持

った僧侶にならなければいけないと考えます。ということは浄土とは所謂私達からみれば遠いあこがれです。その域に達する前に現代の生活を考える時、僧侶がズバリ解答を出し、念仏の世界はこういうものであるところを示さねばならないと思います。

松濤 しかし私など単純に一枚起清文などにいわれております、三心四修ということを信じ、説教の際などそれを根本にしていると単純に話しておりますが、この単純に考えるという見方も必要ではないでしようか。

松川 要は法然上人が貫ぬこうとした本質は何んであったかということだと思います。これを理解した上で現代にいかにか生きていくかが問題なのです。

中島 そうだろうと思います。問題は僧侶ではなく、妻子のいる僧侶であるから自分がどう歩むべきかということが解決されないかぎり他人をどうこういふことはいえないでしよう。

寺内 ここまで来ますと宗教大学のあり方に問題があることになりますよ。先程いいた廻向供養等もっと現実的な内容を教える必

要がありますね。

△幅のある宗学へ▽

真野 浄土学の中に応用浄土学理論浄土学という分野をどんどん作っていく必要があると思つてますね。葬式無用論といつても形骸化した葬式であるというのであつて、葬式なり廻向が何故必要であるかということといえば良いのです。

松川 この意味からいえば現在の宗内の大学は要求を満たしていないと思ひますね。

真野 私もその一人なのですが、分つていてもその枠から出られないのです。ですから応用浄土学というような枠から出られるところが必要だということです。この意味から知恩院の宗学研究所は大変重要ですね。

松川 私は一つ提案したいのですが、複数講師制の講義を開くべきだと思つています。一つの問題を討議した上で今週はどの先生、来週はどの先生の講義という方法、および数人で出講し生徒も交えた上での討論をするといった形の講義を是非行なつてもらいたいですね。

安居 私など自分の講義の時間に個々には応用浄土学的な内容の話はしておりますが、はつきりした形の上で行なえるように真剣に考える時に来ているでしょうね。

真野 現行の浄土学では精いっぱい講義はしております。伝統宗学を教えるにしても、四年間ではとうてい教えきれものではないのですが。

△真の実践への飛躍を▽

伊東 要するに実践仏教の強化ということになる訳ですが、先日知恩院でし書を受けた先輩がもっと実践仏教を組み入れてほしかったといつておりました。いくら良い話しを聞いても田舎へ帰ればそれを生かすことはできないというのです。

真野 その実践とは身体を動かすということですか。

伊東 そうです。威儀作法等その実践の理論は分っている人達ですから、それを応用する実践を組み入れてほしかったらしいのです。
谷部 えらそうない方ですが、法式に則つて手を合せることができる人が何人いるでし

ようかね。

伊東 その意味から、先日国立創場で三井寺と三千院の系統の声明を聞きに行ったのですが、実にあでやかでした。聞くところによるとこの構成の年令層は三十半ば過ぎより六十の人々で、週二回四ヶ月にわたつて練習し出演したとのことですが、こうした実践が必要でしょうね。

真野 先程詩吟の話が出ましたが、先ごろ千葉の淑徳大学で長谷川先生追悼の詩吟を吟道部の女学生が歌うのを聞きましたが、しびれはしませんでしたが、涙がでる程感激しました。

寺内 宗教には音楽絵画等各部門があるので、これらを再認識しなければいけませんね。

安居 僧侶とて生身ですから始終緊張してはいれないと思ひます。しかしここはという時になるほどと思わせる態度を持ち合わせるように日頃の鍛練が重要になると思ひます。話しは途中になりましたが、誌面の都合上この辺で終らせていただきます。(了)

十二因縁

—その2—



念仏の信否

渋谷賢応

(長野県茅野・心光寺住職)

十二因縁は無明より生老死に至る系列を、ただ順に観じ逆に観ずるだけではなくて、その間に、時代により人によって種々に分けられ・関係づけられているようにございます。つまり経文に書かれている如く、「無明に因って行あり、行に因って識あり」と言うようなことばかりでなくて、無明と行とは一つの因果関係として、一応他より切りはなして考えられているようです。そのことよりいたしますと三世兩重の因果説ではこれを過去二因とし、二世一重の因果説では能引と言うように説明せられていますが、ともにこの二つを相応せ

しめて考えられているようにございます。なお南伝に於てはこの二つは外されて十因縁となっているようです。事実この二つはそれより始まる他のものと趣きを異にした本体論的な因果説とも考えられるものでありまして、明確に自覚された認識以前のものでしても申しましょうか、無明が我々の意識体形以前のものであったと同様に、この行も主客末分のものであると申さねばなりません。

さて、この無明に相応する行なのですが、無明が迷界の出发点である限り、行もその帰結でなければならぬわけで、ここに云う「行」は、修行の行でも善行の行でもなく、身口意の三業の悪行を云うもののようです。

「善生、諦聴、諦聴、善く之を思念せよ。四結行は一に殺生、二に盗み、三に婬逸、四に妄語、四所とは一に欲、二に怒り、三に怖れ、四に愚癡なり。」(長阿含經第十一、善生經)と言われますように、身と、口と、心とより発する悪行を、無明に対応する行として思惟せられております。

つまりあの懺悔偈にあります。

「我昔より作れる諸の悪行は

皆無始よりのむさぼりと怒りと愚癡とによる、身と心と

口よりの業なり」

と申される業でありまして、このことが迷界の根元であり

無始よりの無明より来れるものと解せられているわけでございます。

言いかえすならば、私たちがは夜行っているありとあらゆる悪行なるものは、悪魔のささやきによるものでもない、出来心より起るものでもない。政治の貧困でもなく社会悪と言うようなものでもない。教育のしからしむるものでもなく時代思潮の変遷によるものでもない。これは人間生存の起源に逆ってはじめとらえることのできる人間悪に起因するものであって、それよりの離脱はここまで掘り下げることによつてのみはじめて正鵠を射ることができると申されておるのでございます。「行」は他人ごとではないのです。外界の責任ではないのです。

百喻經に次のようなお話がございます。

「昔、一人の男がありました。頭の上には毛が一本もありませんでした。冬は大いに寒く、夏は暑くてしかたがない。その上蚊や虻がたかつてうるさくて仕方がない。毎日なやみ続けていました。近くに名医がありました。諸病を根治すると言ううわさが四方に広がっていました。その人はこの名医にかかつて禿を治してもらいたいと思ひましてその家に出かけました。『どうかこの禿を治してもらいたい。いつもこれに悩んでいるのですよ』名医が言うのには『そうですか、実は

私もこれでしてなあ』帽子を脱いだ名医の頭がまた負けずおとらずツルツルでした。『これが治せるくらいなら私も苦勞しません。』

そして經文はまだ続いています。

「世間の人もこのようなものです。生、老、病、死になやまされて長生不死、悩みなきを願ひ名僧をたずねます。しかしその名僧もまた言うでしょう。『私もそれになやまされています。しかしこれだけは癒す方法はありません。生得のものと気づき、その内にあつてしかもその中に永遠の楽しみを求めるより方法はございません。』

この諸惡の起源を外に求めず、内なる人間性の根本に生得の無明を求めてそれよりの離脱を願う所に仏教の他の宗教と異なる正しい姿勢があるわけでありまして、この無明よりの離脱の方法の相違により仏教の各宗が形造られたと申してもよいと思うのです。自力に恃んで解決するか、他力に願つて往生を求めるか、座して内省の中に無明を断つか、仏を念じて無明即断の本願に生きるか。

法然上人の御伝に次のようなくだりがございます。

或る時聖光房、法力房、安樂房、はべりけるに、安樂房上人に尋ね申していわく「我等ごときもがら、かたく十重をもたもたず、つねに妄念をおこし、また勇猛精進ならず

して、わが身の善惡をもちへりみず、ただ弥陀の本願を仰ぎて、決定往生の思ひをなしはべるは、往生しはべるべしや」と。上人のたまわく「其の条勿論なり、所詮決定心を生ぜば、往生すべき人なり。煩惱罪惡等の、往生を障え障えざるをば、凡夫の心にては覺知すべからずといへども、本願に相応する程の念仏申したらんには、其れを障礙して、往生をさまたぐる罪はあるべからず。往生は念仏の信否によるべし。更に罪惡の有無にはよるべからざるなり。すでに凡夫の往生をゆるす。なんぞ妄念の有無をきらうべきや」

安樂房の質問は十重の禁戒、つまり身口意の三業、殺し、盗み、姪逸、妄語、欲、怒り、怖れ、愚癡より發する戒律をたもつことができず、つねに妄念を起して精進することのできない私が、言いかえれば、人間性に根ざす無明により惡行を重ね尽している私が、その身もかえりみることなく弥陀の本願を仰いで往生するなどと言うことが、ほんとうにできるものなのでしょうかと云うことでして、それに対して上人は「勿論なり」と即座に言いはなっておられるわけです。そして、煩惱、罪惡などが、往生をどれ程さまたげるかさまたげないか、そのようなことは私たち凡夫の遠くはかり知ることのできる範囲ではないけれども、無明即座の本願にかなうお

念仏さえ申せば、それを邪魔だとして往生をさせないと云うように罪はあるわけありません。往生は念仏を信ずるか否かで決定するので、罪惡の有無によるものではないのです。すでに本願によって凡夫往生がゆるされています。なんで妄念の有る無しなど問題になりましょうか。と力強く説いておられるのです。

念仏の信否こそ無明、行の本体論理的な、人間の本性に根ざす惡の因果關係を即断する最強の力であると断言せられておられるわけでありまして、ここに浄土のみ教の真骨頂があるのです。

さて、ここに於て私はまた私自身を猛省せざるを得ません。念仏の信否、お念仏をほんとうに信じて申しているのかどうか、問題は無明、行より發して念仏の信否に帰結してしまつたわけですが、「行」煩惱など問題ではない。果してお前はほんとうにお念仏を信じているのかどうか。この問に対して齒に衣を着せず、真裸になつて、何とお答えできるのでしようか。想えば想うほど凡夫、それも小ざかしい凡夫、ほんとうに慙愧にたえません。

自分の禿も気づかずして他人の禿を気にし、自分の信を決定せずして他人に信を説く、厚かましいこと限りなき私です。策励、策励あるのみです。

ハガキでひとこと

寒さと私の健康法



梶川超本

(愛知県岡崎市九品院内)

私はよく寺の者から体を大事にするといわれますが、自分では当然のことと思っていま
す。大衆生活なのであまり勝手なこととはでき
ませんが、モットーとしておりますことは、

第一 早寝早起き(疲れを残さない)

第二 適当な運動(血液の循環を良くする)

第三 程よい食事(酸性食品をなるべく遠ざける)

朝五時半、本堂の勤行にはなるだけ大きな
声でおつとめをします。日の良いかぎりは寝
具を日光に干す。又「くこ」と「げん」のしょう

こ」を等量位(胃腸によい)にまぜてせん
じ、番茶代りにのんでいます。お陰と医者に
は縁が遠く、たまに風邪を引きそうになつて
も鼻水位ですんでしまします。
以上簡単ですが私の健康法を述べた次第で
す。

藤井亮彦

(茨城県古河市正定寺住職)

バターを毎日沢山食べること。

佐藤 闇

(東京都目黒区柿の木坂在住)

暖冬の後、寒さも酷しくなることと思いま

す。若い皆さんは言うまでもなく、修練を
重ねた老人の方も、心身鍛練の好季となりま
した。新年早々から各種運動競技の寒稽古が
催され、宗教上の寒修行など盛んに行なわれ
て、健康増進に努めておられます。

私は二年前健康を害し、入院加療、退院の
後、健康の回復増進に努め、漸く元気を取り
戻すことが出来ました。更に留意して健康を
保ち、命のあらん限りは、自己の完成修養に
励み、世のために尽したい念願でございま
す。

以前は寒い冬、みそぎ修練で海水を浴び、
運動競技の寒稽古に励んだ事を思うと感慨無
量でございます。老境且つ病後の私は無理を
せぬよう、寒さに向う前から抵抗力を養い、
風邪を引かぬことを第一と心掛けておりま
す。

規則正しい生活、食生活の摂生、自己の体
力に応じ白寿体操、その他体操の実行、散歩
や庭作業などにより、体力の衰えぬよう努力
致しております。

若さをもとう

松川文豪

(東京聖橋高校々長)



現代人といえども何かを求める心に変わりはないと思う。

しかし現代には昔の感覚と違う大きな波が寄せて来ている。それを適格に掴み得なかったことが人々をして、既成宗教に背を向かせてしまった大きな要因であろう。新興宗教の繁栄ぶり、その実態を見ると、既成宗教だって、いや既成宗教だからこそ果さなければならぬ役割が、より重かつ大であると思わざるを得ない。

追憶のムード、そこにある教義、寺院、僧侶として涙頂戴式のお説教、江戸の名残りの檀信徒依存主義の考え方では如何ともし難いように思えてならない。

日本の仏教が常にその基盤として訴えて来たものは無我と無常観であった。しかし現代人はそれをセンチメンタルと受けとめ、虚無主義と解した。現代人は、我を主張し、有に生きようとしている。

その他現実生活の中で、どれ程考え方の相違が認められるかについては枚挙にいとまがない程であろう。

今ここではそのうち最も大きな問題を掲げることにする。現代人は

①個人として如何に生くべきか。

②社会人として組織の中で如何に生くべきか。

の二つの課題を背負っている。私たちにとつ

て問題となるのは②の場合のことである。

従来は個人の連合体、寄り合いとしての組織の意味あいが強かったが、昨今ではむしろ一個の人格である構造体としての組織となつて来ていることに注目しなくてはならない。このことをもっと掘り下げてみると、構造体の枠が強化されて、その枠内が一つの宇宙となり、絶対者となつて個の没却、放棄がなされ、要求されようとしている傾向にあると云つても過言ではないであろう。

過激な学生運動や、労働運動、新興宗教等にその姿を見ることが出来ると思う。しかも歴史的な流れがこれの拡大化の傾向を

顯著に証明していると思う。

これらの傾向は宗教家、僧にとって重大な課題であるし余りにも厳しい試練であると思う。

それぞれの時代に於ける先覚者であり、世の指導者であられた釈尊や各祖師方が若し現世に出現されたら、どうなされるだろうか。私たちはこの仮説にこたえられなければならぬ義務を持っている一人である。

私はこう感じて浅才をも省みず、この問題を考えてみることにした。そのためとは云え洵に生意気なことを申しあげることになるかも知れないし、何と判らぬくせに勝手な放言としての試見を述べさせて頂くことになろうかと思うがあらかじめその思ひ上りをお許し頂きたいとお願い致す次第である。

今回は先づ自分たちの内部の側の反省から始めることにしよう。

(一)僧は三界の指導者でなくてはならない。

○実力・実行力・人間的な魅力を備えた者であるべきだと云う自覚を持つこと

○優秀人材の育成に当ること

(二)寺院の在り方を検討すること。

○施収入依存から脱皮経済基礎確立をはかるべきだ

○所謂葬式坊主的在り方からの脱皮

○世襲制度の改善

○各界に進出して人と触れること

○地域に於けるセンターとして開放すること

(三)教団の体質改善を図ること

○若い実力者による宗教運営

○多彩な優秀頭脳の結集

○教団—寺院—檀信徒間の組織化

○宗派セクトからの脱皮—視野の拡大

(四)教団は積極的に活動せよ

○政財界と結び、有効な協力体制をつくれ

○仏教徒の一票が政治を動かす力であることの認識と行動をもて

○中央宗庁の指示を強化せよ

○コンサルタント、カウンセラー等を配置し、各寺院の総合開発の相談診

断に当れ

○教師資格授与、住職任命等厳格であること

(五)教義の近代化をはかれ

○現実に生き、リードする釈尊精神、法然精神をさぐれ

○宗教教育の近代的具体案を立てよ

○教義の各界向け（経営者・労働・商人・学生・婦人等）PR法の研究

(六)その他

○関係教育機関のチェイン化とアカデミックな総合大学との直統をはかれ

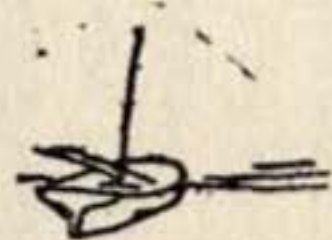
○檀信徒のための福祉施設をつくれ

○宗祖八百年記念事業は宗門発展の抜本策であれ

現代は嘯みつき時代であるが私は斗争も不平も好まない。若し云わして頂けるなら愛宗護法の気持から止むに止まれぬ歯がゆさを感じる。こんなことでは現代人から置き去りにされてしまうのではないか。

有能な諸大徳の輩出を待つや切なるものあるを訴う。

阿弥陀仏の御性質



岡 本 薫

(作 家)

○

念仏をすれば、その精進の程度に応じて、
仏心の智慧と慈悲がわが心に生じてくる。こ
れが念仏の功德であるが、これだけでは自己
満足に終る。自己満足の行を自利という。

自利もとより大切であるが、自己に得た仏
心を社会の人々に施すことがまた大切であ
る。これを利他という。菩薩行という。自利
と利他がそろって初めて正しい仏道修行であ
る。浄土宗のおてつき運動とは利他行のこと
である。

△阿弥陀仏の二利▽

何故に二利の行が必要であるかということ
は、阿弥陀仏を分析してみれば分る。阿弥陀
とは無量寿と無量光であることは常識である

が、無量寿とは無限の時間に生きること即ち
生死の超越である。生死を超越して永遠の生
命に生きることが人生最高の幸福である。

しかしながら生死の超越をしたからとて、
それは自己のみの喜びであつて、他人には関
係のないことである。即ち自己満足にすぎな
い。よつて無量寿は自利に通ずる。

無量光は空局的無限に生きることであるか
ら、自己の光明を全人類に及ぼして社会の淨
化をはからなければならぬ。それが即ち利
他行であるから無量光は利他に通ずる。

阿弥陀仏が永遠に自利と利他に生きてまし
ますのであるから、成仏を目的として修行す
るものもまた自利と利他に生きるのは当然で
ある。

△陽 と 陰▽

仏は相對の世界を超えた御存在であるか
ら、その性質には陰陽の差別はないようなも
のであるが、阿弥陀仏を無量寿と無量光とに
分けて考えるということは差別観であるか
ら、差別観に立つ場合はやはり陰陽に分けて
みることができる。

無量寿は時間に、無量光は空間に関係する
から、時間と空間について陰陽を考えてみれ
ばよいことになる。時間は全く超感覺的であ
る。空間も超感覺的であるが、空間には感覺
的な森羅万象が存在している。この点が時間
とちがっている。時間は超感覺的であるか
ら、これをはかることはできない。しかるに
年月を定めてあるのはどういふわけか？

それは太陽があるからである。また月があるからである。曆には太陽曆と月の満ち欠けから計った陰曆とがあるが、太陽がなければ月の満ち欠けもないのであるから、時間測定

の根源は太陽にあるということが出来る。われわれ地球人にとっては、太陽がなければ時間の存在を知ること、また時間を測定することも出来ない。よって極言するならば時間とは太陽であるということが出来る。

太陽が陽性であることは常識であるから、時間は陽性と定めるのである。よって無量寿は陽性である。また無量光は空間に関係しているから陰性である。

△表 と 裏▽

表と裏は紙にもあるが、家にも表口と裏口がある。今阿彌陀仏も表と裏に分けるならば、陽性の無量寿が表で、陰性の無量光が裏であると云うことができる。無量寿が表であるから、阿彌陀仏のことを無量寿如来と称している。裏からいえば無量光如来であるが、あえて無量寿をもって表榜するのは、人の家でも男主人の名前を表札にしてかつてある

のと同様である。

また太陽は表であり、地球は裏である。男性は表であり女性

は裏である。自利は表であり、利他は裏である。自利とは宗教的個人主義ないし自由主義のことであるが、これは表であり、利他とは宗教的

社会主義であり、これは裏である。表裏一体という言葉があるように、表と裏とは分つべからざるもの即ち一如である。その価値は同格である。自由と平等が喧嘩しているのは、表と裏は一如であり同格であることを知らないからである。

また心は表で物は裏である。因は表で縁は裏である。正は表で反は裏である。

△タテとヨコ▽

裏を見せ表を見せて散る紅葉
地図にはタテ線（経度）とヨコ線（緯度）があるが、このタテとヨコは何を意味しているのだろうか。

無量寿は自利の極限を意味するが、自利とは自己の向上であるから、もし線で表わす場合はタテ線となるべきである。また、無量光

は利他の極限を意味するからヨコ線で表わすべきである。

よってタテは幸福をヨコは道徳を意味している。福德円満が理想である。道徳の二本の柱は智慧（正義）と慈悲（仁愛）であるが、智慧はタテ慈悲はヨコの道徳である。また敬はタテ愛はヨコの道徳である。道徳は織物と同じで、タテとヨコがそろわなければ円満でないのが、一方がこわされると他方もこわれ

てしまい。「天網恢々粗にして洩さず」の天網とはタテとヨコの道徳のことである。

以上をまとめると次のようになる。

無量寿Ⅱ時間、陽性、表、自利、自由、タ

テ、因、正、智慧等

無量光Ⅱ空間、陰性、裏、利他、平等、ヨ

コ、慈悲等

しかし右の両者を綜合したものが最尊第一の阿彌陀仏である。故に念仏すれば人格円満な心となることができる。ただし利他行も念仏の半分の行であることを忘れてはならない。



——すくすくと育つ子供達をいかにより良き方向に導びいていくか。今日の揺れ動く大学問題等を考える時、もう一度検討すべき時点に来てはいないでしようか——

幼児の宗教教育の現状

形 部 英 一

(名古屋・森山幼稚園副園長)

幼児の宗教々育の現状は福井先生の発表にもありました通り、非常に深刻であると同時にその重要性もみなければなりません。こうした立場に立って私共の幼稚園では、四月に入りました時には、明るく正しくなかよくという一つの年間を通しての理念を園児・父兄先生に示しております。

これは幼稚園に子供を送り出して来る家庭は新家庭が多いのです。ですから未だ信仰的な基盤も持たない父兄が大多数ですから、親をも含めた宗教々育をしなければならぬ訳です。従ってこの三つの言葉を年間の教育の理念としてあげております。

それではこの点をふまえた上での幼児の宗教々育、特に浄土宗布教をどのようにすればよいか。この点について私共もいろいろ考えなやんでいるのですが、まず人に会ったならば挨拶をさせるといふこと、これもいうなれ

ば宗教的儀礼の第一歩ではないか、文部省から示されている教育要領には様々な項目がありますが、挨拶とか人に何かをしてもらった時にはありがとうと、素直に口から言葉が出るような習慣を身につけさせるように努力しております。

次に合掌であります、私自身も合掌の真髓というか、専門的な立場で合掌の意義などを論じている訳ではありませんので、この点はお許しをいただきたいと思います、子供達には素直な言葉が口から出ると同様に、素直に手を合せて仏さまにお祈りするよう心がけることを教えております。特に合掌は朝、帰りの日常の内容としております。

更に日常のこととございますが、合掌と同じに朝、仏さまに礼拝する際に子供達に仏教的な歌を教えております。歌がどういう点から不離であるかといひますと、特に合掌・礼

拝・歌というものは仏さまに近づくもの、親近感を与えるのに適切であると考えられるからです。それでは親近感を持たせるために本堂を使用しているのかと、よく聞かれるのですか、日常は一切使用しておりません。ただ、仏さまの額等を講堂に飾り、園庭には地藏さまを安置して、いつも皆さんの周りには仏さまが見ていられるんですよと、教えております。こうしたことが日頃から仏さまに親しむ機会になるのではないかと考え実施しております。

次に日々の仏教的な教材ですが、バラバラではありますが出しております。これが浄土宗的かといいますと、そうではなく全仏教的とでもいうようなものが出されております。先生用にはカリキュラムの指針となるもの、園児には絵本の子供のことばの絵を利用し、家庭用には仏の子ということ、先生から家庭に至るまでの一貫した教材となるものなどを使用しております。まだ内容的には必らずしも一貫しておりませんが一応宗教的な線は貫ぬいております。

さてそのほかの内容ですが、特に本年度か

らは仏教的な出席カードが出てまいりましたので取り入れております。また本山からいただく誕生会のカードとか掛軸・スライドなどを常々利用しております。

以上のような現状から判断すると仏教的な内容が保育に多いように受け取られるのですが、私自身の考えは決してそうではありません。あくまでこれは先の明るく正しくなくということという一年を通しての理念を貫くためにやっている訳であり、仏教的特に浄土宗的な内容としてはそれぞれの量子にすぎないのです。ですから日常の保育は仏教的な内容からはほど遠いかも知れません。

私も今回のこの発表のため全部とまではいきませんでした。が名古屋の浄土宗の幼稚園の現状を調べたのですが、所謂全部仏教的なカリキュラムに則って、そしてその流れをくんで行なっている幼稚園・保育園はないようです。ですからこのないようなものをないようになさなければと感じながら本席に出たような次第です。

さてそれでは年間の行事はどのようなことをするのかということですが、まず花祭り

ですが、これには本堂を利用しています。本堂はごぞんじの通り戦後新築・改築されました所は近代的な明るいいものとなっておりますが、私のところは旧来からの幾分薄暗い、さむい本堂です。花祭りはお釈迦さまの生誕を祝う行事ですから、明るく特に視聴覚的な近代的な雰囲気の中で子供達に親しみのもてるように配慮しております。四月は入園等でできませんので一ヶ月遅らせ、五月八日に厳肅に行なっております。毎年のことですがこの行事が終わりますと、園児の中に仏さまに対する親しみを感じる様子を見ることが出来ます。

次に八月、夏休みの出園日にお地藏さまのお祭りをいたします。この時は園庭にあるお地藏さまを中心に、みんなを守っていたいたく、みんながケガをしないようにと、この点を強調しながらお地藏さまの前で取り行います。この行事のあとにも園児は自然にお地藏さまに親しみを覚えるようです。

続いて仏教の行事とは関係ありませんが七五三のお祝いをいたします。本来は神社にお参りしてその成長を報告し、今後の成長を願います。願うのですが、しかし私共の考えで、仏さ

まの前でお祝し元気であることを報告し、これからも元気で大きくなるようお願いする、これは集団の中で自分を対象としたお祝いであるということから一番喜ぶ行事でありますから取り入れております。

次は成道会です。これは実際問題として、内容的に理解しにくい点ありますので年々苦勞しております。というのは死んだ後どこへ行くのか、現在のところでは私共の考えました劇などをやっております。私がお釈迦さまの役になっておりますが、実際にはこんなには太ってはいなかった筈ですから、盛りあがらないものとなってしまいます。最後にみんなで十念をし、共々お釈迦さまのようにというこでと結んでおります。

以上が年間の大体の仏教的行事ですが、続いて職員にはどのような仏教的浄土宗的な教育をしているかという問題です。職員は大体三年乃至五年で新陳代謝しております。ですからその半数が私共の仏教的な教育の理念を理解していないのではないかと考えますが、そのためそのような一般教育を受けて来た職員のため、園長が三日間程説教まじりに教え

るのですが、その七十%程は実際には理解しておらず、効果もあがっていないようです。それでは明日からの保育にさしつかえることになりそうですので、中央でのあるいは地方での浄土宗の各種講習会に機会あることにそのような職員は聴講させながら教育しております。

以上幼稚園での宗教々育の現状の一端を述べさせていただきましたが、これらの教育を受けた幼児が上の学校へ、更には社会人となった折に、自分の幼稚園の時代にどこされた宗教情操教育をどのように受けとめているか。その他様々な問題があると思いますが、今回は実際の場面での内容を中心に述べさせていただきます。

— ○ — ○ — ○ —

以上、先月号での渡辺真澄・福井豊信両氏および前述の形部英一氏、三氏の浄土教学大会シンポジウムでの発表の要旨をみたのですが、実際に現場にたずさわっている方々の意見として切実な内容となっております。たまたま今回は浄土教学との関係による幼児教育という制限があったため、広い意味での宗教々育の実体・目標等が明確にできに

くいことがあったとはしても、今日のような社会体系の中で宗教々育のしめる位置が再認識され、すでに中高等学校では倫理・道徳の名のもとに講座の中に組み入れられていることを考え合わせる時、誠に有意義なシンポジウムであったと思います。

「子は一問一答ヨリナバカニストエナリ」と申しておりますが、この宗教・倫理・道徳の諸問題は何も稀世の天才のみが論じるものではありません。私達が先達の歩まれた道を参考として、日常社会におこる道徳上の諸事象にいかに対処していくか、人として目指す道は何のであるかを明らかにすることは必要かくべからざることでありましょう。したがってこれら宗教・倫理・道徳の一分野を荷負うべき浄土教の流れをくむ私達はそれなりの責任のもとに幼児乃至老人に至るまでの人々の導びきをなすのは当然といわねばなりません。それにしても今回このような熱心な発表があったにもかかわらず、聴講者の少なさにはあきれました。他の機会に検討はされたいと思いますが関係各位の再考をうながしたいと思います。



たとひ七八十のよはひを期すとも、おもへば夢のごとし。いはんや老少不定なれば、いつをかぎりとおもふべからず。さらに後を期する心あるべからず。ただ一すちに念仏すべし。
(十二箇条問答)

「期す」は期待する、又は求めるという意味で、「一すち」はひたすら、又は全然ということとあります。

誰でも毎日を息災に過している者は、当然のことのように七八十はおろか、百歳まで生きていくつもりでいます。特に身体の強健な者は寿命のことすら念頭にありません。しか

し幸い八十歳を迎え得たとしても、恐らくその人は今更のように人生が余りにも短いことをかこち、思い返して夢にも似て儚ないことであつたと感じ入るに違いありません。

人として生老病死の四苦から逃れることはできません。特に年老いた者には必ず老苦があつて、一には盛色が衰退し、二には氣力が衰退し、三には諸根が衰退し、四には受用(受け入れ)の境界が衰退する等の若しみを味うことになります。

大經に「何ぞ衆事を棄てて、おのおの強健の時におよびて、つとめて善を勤修し、精進に度世を願わさる」と説かれています。若く身体が強健な内にこそ、どのような修行も努力もできるのであつて、年老いてからでは思ふようにまかせず、後悔しても追いつくものではありません。安閑として毎日を暮している者に対して、法然上人は

「閻魔の庁にいたりぬれば、つみの浅深をさだめ、業の軽重をかんがへらる。法王罪人とひていはく、なんぢ仏法流布の世にむまれ、なんぞ修行せずして、いたづらにかへりきたるやと。その時にはわれらいかがこたへ

んとする」

と誠に戒められます。人々はなすべき時になさず、怯み得ないものを頼りとし、己が生命に対する自覚も反省もない生活を繰り返しています。今生きているということが判るためには、いつかは死ぬものであるという意識がもとになる筈です。そこで今日の一日一日が大切になってきます。法然上人が「常に臨終のおもひをなして、臥ごとに十念をとなふべし」

と仰せられたことも、このことに外なりません。今日一日の生活を感謝し、床に入る時にお十念を唱えることは、必ずや明日も今日と同じく充実した生活を送り得る糧となるであります。法然上人はもっと劇しく「人の命は食事の時、むせて死する事もあり。南阿無弥陀仏とかみて、南無阿弥陀仏とのみ入るべきなり」

と、常に仰せられていました。このお詞は一瞬一瞬にもえる生命を、しっかり自分のものとする心底といえると思います。相撲の力士は足が剣が峰にかかると、よく強敵を倒すといひます。火災にあつた人が、

意外な力を發揮して自分ながら驚くといひます。まだこの後があるということ、明日があると油断すること、来年に期待をかけてはなりません。阿弥陀さまの光明に浴し、観音勢至阿菩薩のご庇護をいただくために、ひたすらお念仏を唱える生活こそ真に充実した人生でありましょう。

—○—○—

菩提心は諸宗をのをの其意之同じからじ。

浄土宗の意は、浄土にむまれんとねがふを

菩提心といふ。
(三部経釈)

菩提心といふことは、普通に「上は菩提を求め、下は衆生を教化しようと願う心」であるとされています。これを詳しくいえば四弘誓願であります。即ち衆生を救い、煩惱を断じ、法門を学び、悟りを証し、そして「自他法界は利益を同うし、共に極樂に生じて仏道を成せん」と誓うことであります。

大經に「上輩の者というのは、家を捨て欲をすてて沙門となり、菩提心をおこし、一向に専ら無量寿仏の名号を称え、もろもろの功德をおさめ、浄土に往生したいと願う者のこ

とである」とありますが、法然上人はこの句を解釈されて

「上輩の中に、菩提心等の余行を説くといえども、上の本願に望むれば、意ただ衆生をして、専ら弥陀仏の名を称せしむるにあり」

と、菩提心もまた余行であると説かれています。

ところで觀經に「上品下生の者というのは因果の理法を信じ、大乘を誹謗せず、ただ菩提心をおこし、こうした善行の功德をふり向けて、極樂浄土に往生したいと願う人のことである」とあります。ここに説く菩提心について善導大師は「ただ一念をおこして苦を厭い、諸仏の境界に生じて速に菩薩の大悲願行を満たし、還って生死に入って、あまねく衆生を度せんとねがう。故に発菩提心と名づく」と説明されていますが、これはいわゆる普通の解釈であるといえます。

それにもかかわらず法然上人は上品下生に説く菩提心について、善導大師の解釈によることなくして

「上品は大乘の凡夫。菩提心等の行なり。菩提心は諸宗をのをの其意之同じからず。浄土

宗の意は、浄土にむまれんとねがふを菩提心といふ」

と、浄土往生を願う心のことであると解釈されました。これは全く法然上人独自の御解釈といわなくてはなりません。しかも大經の場合とあわせ拝見するならば、菩提心についての法然上人のご解釈が二通りあるということになります。どうしてこのように違ったご解釈があるのでしょうか。他の御法語に「願わくは諸の行者、一を執して、万を遮するることなかれ、諸の往生を求めんの人、各すべからく自宗の菩提心をおこすべし。たとひ余行なしといえども、菩提心をもって、往生の業とするなり」

とあります。このように菩提心の解釈について、各宗それぞれの立場からいろいろの解釈があることを示され、浄土宗においては菩提心は浄土往生を願う心であることを明かにされています。しかし法然上人ご自身に二通りの解釈をされたことは、上人のご信仰から出たことと思います。

法然上人は經典の字句を解釈し、それに基づく修行を積んでご信仰を深められたのでは

ないのです。あくまで求めて止まない信仰という明鏡に映されて經典の字句を解釈された

のであります。従って經典について新たな意義のご意見となったのでありましょう。經典

を読むのに、どうしても上人の御指南なしには読めないわけです。
(村瀬秀雄)

の の さ ま

有 賀 伸 興

(神奈川県横浜在住)



過日、私は東京の下町にある友人の寺をたずねた。その寺にはいそがしい折に手伝ってくれる近所の主婦が出入りしている

が、その人には四才になる一粒種の元気な男の子がいることを聞かされていた。

今まで私がたずねた折にはどうしたことかその男の子に一度も会う機会がなかった。たまたま今回は母親と一緒に来ており、初めてのご対面とあいなった。

母親は丁度その寺で総代の新年会を行なっていたため、子供にかまうところか忙しく手伝っていた。遊び相手のない子供は誰か自分の相手になってくれる人はいないも

のかと、人かまわず邪魔をしていたため、皆からしかられ不気嫌な面持のところへ私が行ったのです。

小さな子供とて御対面から印象を悪くすることはできない。たちまち子供の相手をすることはできなかった。はじめは見知らぬ人故、恥ずかしげに自分の宣伝を始めた。そのうちだんだん慣れてくるにしたがって、子供本来の人なつつこさが見られ、いたずらが始まった。

「おじちゃんはおクが昨日夢の中で見たおじいちゃんにそっくりだ。だって、ちっともボクのことしからないんだもん」

と、揚足をとりながら、今度は私の身辺調査をはじめたのです。適当にこまかすと、「だから大人はきらいなんだ、ちっとも本気になって相手になってくれないから」

何か自分の心をこの四才の男の子に読れたのではないかと、一瞬間を赤らめてしまった程でした。

「ボクが何んでもわかるのは、どうしてか知ってる」

逆に質問を浴びせられました。

「それはね、ボクがいつもお母さんと一緒にお寺へ来ると、いつもの。の。さ。ま。に手を合せているからだよ、のさまはね、いつもボクのいうことを聞いてくれるから、何んでも話せるんだ」

この子供は本当に仏の教えを知っているかどうかはわかりませんが、何か自分が恥かし、またこのような子供が沢山いたらと思うような友人宅での一出来事でした。



あ　る　微　笑　み

松　田　竹　治

(東京都江戸川区在住)

昨年、暮れも押詰まった十二月二十七日の
で早朝、母は肝臓癌がもとで七十六歳の生涯
をとじた。誰も人の子である以上は親の死ほ
ど悲しいことはないであろう。いかに天命を

全うしたとしてもである。ことに私は五人
姉弟の末っ子であったため、三十を過ぎた今
日まで何かと母親にあまえることが多かった
性か、母の死をある程度まで予期してはいた
ものの、いざ直面してみると何んともいえな
い心地があたりを横切ったのです。

それでも通夜・告別と型通り取り行なうう
ちは大勢の人込みにまぎれ、悲しみよりただ
無難に行なわれるように思うが先で、何んと
なく過ぎてしまいました。

漸く落着いた一月の中旬、六才になる長男

の手を引いて墓参りに行った折、子供から、
「おばあちゃんはどこへ行ってしまったの、
遠いのさまの国ってどこにあるの」

と、問いかけられました。その時脳裏をか
すめたのが通夜の際の和尚さんの話でした。
和尚さんの母親と私の母親は同郷であったた
め、私の母はよく寺に行き茶飲み話しをして
いたためか、和尚さんにも私の母の印象が強
かったようで、そのことに触れた後、

亡なられたお母さんはよく寺に出入してお
りましたから迷うことなく浄土の郷へ旅立
たれるでしょう。人をよく愛し、にくま
ず、素直に考え、悪口をいわない人でした
から、生れながらに仏さまとなる資格を持
ち合せていらしたのです。今後はその教え

を受けた皆様が日常生活の中にお母さんが
なさってこられた動作なりを思いうかべ、
自分の動作の中に生かしさえすれば、お母
さんは今後も立派に皆様と共にこの世にく
らすことになりますよ。

この和尚さんの話しは一種の方便と受け取
られる方もいると思いますが、当の私にとっ
てはこれ程うれしく思った話しはないといっ
ても過言ではありません。自分の日頃の行動
の中に亡き母を思い浮べられれば、姿こそ見
えなくても確かに一緒に生きることになる。
自然と自分の行動にも責任感をもたずにはい
られなくなる。悲しみに沈んでばかりはいら
れないと、一瞬微笑んでしまった。

この様子を見た子供が、

「おばあちゃんのいる国が分ったんだね」

と、怪訝そうな顔付で見上げてきた。

「そうだよ、おばあちゃんは姿こそ見えな
いがいつも私達の周りで見守っていてくれる
んですよ、だからお前も人のいうことをよく
聞き、わがままなことはいうんではありませ
んよ。ボクだって、もうこの四月から学校へ
入るんだからね」

自然私の話しも和尚さんゆずりのお説教め
いたものとなっているのに気づき、思わず子
供をみると、分ったのか否か、ただじっと私
の顔を見つめておりました。そして、

「おばあちゃんは、よくボクにキャラメル
なんか買ってくれたから、今度はボクがおば
あちゃんにお線香をあげてやるんだ」

と、煙が眼にしみたのでしょうか、涙を出
しながら、一本々々母の墓前にさし、小さな
掌を合せて、何かしきりに一人ごとをいって
おりました。

「ボクちゃん、今何をいってたの」

「おばあちゃんにね、良い子になるって約
束していたんだ。だってボクが悪いことをし
ていたら、おばあちゃんは静かに寝ていられ

ないもんね」

私はこのことばを聞いて、一瞬胸にこみあ
げてくるものがあつた。この小さな子供は人
の死というものをどのように考えているのだ
ろうか。ただ無邪気に線香をあげ、掌を合し
ているこの子供にはわかつうにもわかりよう
のない人の死。

ただ子供には人の死を通して、正しく生き
ていくということが幾分かはわかつたようで
す。それにしても死とは何を意味するのでし
ょうか。苦楽を共にして来た肉親が忽然とこ
の世を去っていく。いつもならばそこに座つ
ていたであろう座卓の一隅に、今は何かすき
間風でもふきぬけていくように感じられて仕
方ない。

この世に生れ出で、やがて死にこの世を去
っていく。これが人に与えられた運命である
といってしまうえばそれまででしょうが、何か
わり切れない気持が自分を支配しているので
す。しかし、こんなことばかりいっていても
仕方がない。この悲しみを乗りこえていかね
ばならない。いつかは別れねばならないので
す。和尚さんは通夜の際に前に続けて、

人の生命は極端ないい方をすれば、この世
に仮りに現れたものということもできま
す。それではどこより生れ、どこに去って
いくか、よく土より生れ土に帰るといわれ
ております。しかし、この世に生きる間に
はその人、その人の考えをもとに社会に貢
献してきたのですから、その人の残された
行蹟は大切にしなければなりません。そし
て死した後、あとに残された皆様の礎とな
るため土に帰ったのですから、その土をし
っかりと踏みしめ、ゆるぐことなく精進さ
れる、これこそが亡ったお母さんへの唯一
のはなむけとなりましょう。

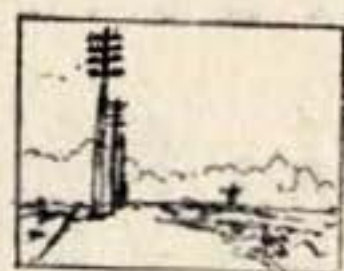
今、こうして母の墓前にぬかずく私にはこ
のことばがいたく胸をさしました。そしてし
ばらく無言のままひれふしていましたが、

「お父さん、何も心配することはないよ。

ボクがおばあちゃんのかわりにがんばるから
まかしておいてよ」

という長男の甲高い自信に満ちあふれた声
で我にかえり、思わず共に微笑み、母の寝る
墓をあとにしたのです。

少年会が本堂を建てた



高橋良和

大津市の石山は、石山寺という名刹があるし、琵琶湖から流れてくる瀬田川口でもある。四季に風光の美しいところで、観光客の数も多く、石山の名月として知られたこの寺の秋月は一入であるといえる。

石山寺は真言宗であるが、この石山寺の隣り少々いったところに昔石山寺の別格地であったといわれる浄土宗の西蓮寺という寺がある。この西蓮寺のあるところは寺通といって、大津市に合併以前は一宗を形成していたところで、この西蓮寺の和尚の吉水善応さんは、近所近在ではこどもの和尚さんとして、日曜学校で明けくれの日をおくる熱心な子供党であったし、また社会教育に一生を捧げた人なのである。

この吉水善応さんが亡くなってから、三十三年（昭和四十三年）の月日がすぎているが、その何十年にわたる教化や、布教が、この年に目出度く実を結んだのである。

善応さんは西蓮寺の二十六世であって、この寺に入寺する

前は、吉水瑞誉という福井県のお坊さんの弟子であった。在家出身であって、武生の田中朝右衛門という人の長男であったが養子となって、吉水瑞誉さんの弟子になったのである。

縁あって、石山町寺辺の西蓮寺に入寺してからはじめたのが紫雲少年会という日曜学校だったので、仏教の日曜学校が東西の地ではじめて創設されたのが、東京増上寺の福田行誠上人によって、もう一つは博多市万行寺の七里恒順和上によってはじめられたのは昭和十三年であるから、それからおくれること二十年ということになるが、その間日本中のどこでもここでも日曜学校がつくられたわけではないので、おそらく、関西地方における日曜学校では、この紫雲少年会が一番古いのではないかと思う。

それほど古くから日曜学校をはじめたのが、その善応さんであって、その後、日曜学校のために母の会をつくり、また大正元年には、季節の託児所をこの寺に開設しているくらい

であるから、この善応さんが、関西地方における教化、社会福祉事業の草分けとみても過言ではないのである。

ほんとうによくもまあ、これだけ寺を挙げて子供のことをやれるなあと感じるほどであって、それが一寸も表に出ず、全く一人コツコツとして子供の仕事に何十年の歩みをつづけたのである。

決してはなしは上手でもなかった。紙芝居もうまいとはおもわなかったが、然しどうしたことか子供には人気があつて三十年、四十年の紫雲少年会の歴史のなかにはさして起伏もなく、少年会がつづき、更に青年会といわれる仏青運動も併行して、寺は青少年のために開放されたのである。

然しそれだけなら、善応さんの存在は、一生陽の目を見ることにならない、裏街道を歩んだことの紹介になるが、その後それを守った法嗣の故吉水靖芳氏、そして現住職の吉水哲応氏の代になって、この善応さんの教化が実を結んだのである。

というのは、この少年会に集った人々が、立派に成人して、それもこの地域の寺辺町の年長老となり、六十七世帯の戸主が西蓮寺のために立ちあがるのである。

この西蓮寺の少年会に集まった六十七世帯の人々の共有財産として、大平山というのがあった。度々この大平山を譲っ

てくれといわれたが、それを断りつづけているうちに、今から七年前にこの大平山の斜面百三十万平方メートルが、団地の用地として約三十万平方メートル、刑務所用地として、国に十萬平方メートルを売却することになって、その代金として、二億五千万円がころげてきたのであった。

そこでみんなで相談した結果、元金は手をつけずに積みたて、これから生ずる利子を公共的なものに使いたい、そういつたことで相談がなされた。

今は七十八才になっている大平会の理事長で旅館を経営している三宅五郎兵衛さんが、この西蓮寺のことを思い出したのである。それもその筈で三宅さんは西蓮寺の紫雲少年会の生徒であつて、善応さんに相当な世話になつてゐる人であるが、どうや、みんな昔少年会で世話になつた西蓮寺の本堂を新築したら、善応さんが生きていたらきつとよろこばれるだろうが。

と、遠慮気味に相談をもちかけると、そこにいた六十七世帯の檀家の人々は、みんな口をそろえて、賛成賛成。

またたくうちに決まつたのである。

それもその筈であつて、集まつた六十七世帯の人々はみんな昔の紫雲少年会の会員であつて善応さんに鼻をかんでもらつた子供だったのである。

編集後記

はなしは決まった。それなら早速着工しようというので、昭和四十三年四月に着工、二年間の利子を貯えた三千二百万円で工事にかかったのである。

そして八カ月かかって、鉄筋で三百九十平方メートルの本堂とその上、善応さんが生きているときに欲しいといっていた信徒会館まで建てたのであるから、全く見事という外はない。

この信徒会館はいつでも檀家のものが集まれる気安いホールといったことと、紫雲少年会、紫雲青年会の道場として、今はその二男であり、住職である吉水哲応氏が管理と運営にあたっている。

本堂に安置された位牌の前で、善応さんの三十三回がつとめられたのは今年の十二月十四日であった。

六十七世帯の大平会の人々、いわゆる紫雲少年会の出身者は集まって、落慶法要とはまた異なった親しい、くつろいだ法要を営んで故人を偲んだ。

善応さんが撒いた教化の種々、三十三年目に美しい花を咲かせたのである。

善応さんの墓は西蓮寺の歴代住職の墓地に静かに眠っているが、その功績をたたえるように、高台の西蓮寺は田舎に珍らしい大きな本堂の墓がそびえているのである。

○厳冬の二月となりましたが、皆様如何お過ごしでしょうか。新年早々、剣岳を中心とする日本アルプスの山々では集団遭難という暗いニュースが伝わりましたが、幸いにも天候の回復が早く、一部犠牲者が出たとは申せ、奇蹟的にも幾人かは助かり史上最高の記録だけは出さずにすんだことは不幸中の幸いでした。

○二月十五日には涅槃会、「讃岐の寝釈迦」として有名な香川県高松市竹生山町法然寺の細井照道氏よりの便りによりますと、当時所蔵の寝釈迦のうしろの壁画が、現在高松地検の泉政憲検事正の手によって画かれつつある由、泉氏は日曜画家四十年、玄人はだしの水墨画を得意とする人だそうですが、廃仏き釈で荒れ放題になっていたものがようやく修復できるとなり、細井氏も感無量とのことでした。この法然寺は法然上人にとってもゆかりの寺、共に壁画の完成を待ちたいと思います。

○先月号編集後記で弊会の窮状にふれましたところ、早速に一部の方よりご篤志をたまわり編集部一同感激のかぎりです。まだまだいたらぬ点、多々ありますが、一日も早く一人歩きできる浄土にするよう努力いたす覚悟です。皆様方一人一人の厚い理解をお願いいたします。

伺 御 中 寒

法然上人鑽仰会

特別会員一同

稲岡 覚順

稲田 稔界

大河内 隆弘

窪川 信丈

久米原 達丈

清水 順碩

戸松 学瑛

中島 真哉

寺内 大吉

松川 文豪

(五十音順)

村瀬 秀雄 訳

新 刊

和 文 浄 土 三 部 經

新書版
204頁

附・法然上人撰「三部經釈」抄述

念仏信仰の聖典三部經の全訳

定価200円 送料55円

発行所 法然上人鑽仰会

TEL (262) 5944
振替 東京 82187

「浄土」講読規定

一部 定価 金六十円

会費一力年 金七二〇円

(送料 不要)

浄土 二月号

昭和十年五月二日

第三種郵便物認可

昭和四十四年一月二十五日 印刷

昭和四十四年二月一日 発行

定価 六十円

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式会社

東京都千代田区飯田橋一ノ十一ノ六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

振替東京八二一八七番

東京都港区芝公園十九号地の一

浄土宗務支所内

編集室 法然上人鑽仰会

大 正 大 学

東京都豊島区西巢鴨 4 の 530 電話 (918) 7311

昭和 44 年度学生募集

募集人員 200名・2, 3年若干名 大学院修 40 名・博13名
カンセリグ研究生 (10名)

出願期日 第一次 1 月 10 日～2 月 25 日
第二次 3 月 2 日～3 月 27 日

試験日 第一次 2 月 26・27 日 第二次 3 月 28・29 日

学 部 専 攻 科

仏教学部 仏教学科—仏教学・梵文学・浄土学・天台学・真言学

文学部 文学科—国文学・米英文学

史学科—日本史学

哲学科—西洋哲学・宗教学・中国学

社会学科—社会学・社会事業

大学院文学研究科—仏教学・国文学・宗教学

カンセリグ 研究生

男女寄宿舎あり☆詳細は同学庶務課入社案内へ (〒150 円封入)

◇ 浄 土 ト ラ ク ト ◇

四季の寺まいり (再版) 安居香山著 価30・〒15

浄土宗のおしえ (五版) 宮林昭彦著 価30・〒15

一枚起請文をめぐって 村瀬秀雄著 価120・〒35

選択集私解 竹中信常著 価125・〒30

ものいう石 竹中信常著 価150・〒45

多数お申込みには割引いたします。施本にご利用下さい

発行所 法然上人鑽仰会 TEL (262) 5944
振替東京 82187